漢　字　3

加納　千恵子

Kanji 3

KANO Chieko

1．クラスの概要

日本語補講「漢字３」は、週１コマ（10週）の75分授業で、登録者数は毎学期20人前後、非漢字圏学習者、漢字圏学習者（中国、台湾など）および韓国の学習者が混在している。テキストは、『Intermediate Kanji Book』Vol. 1 の前半（１課～５課）を使用している。学期中に４回の小テスト（１課、２課、３課、４課）と５回の宿題（１課、２課、３課、４課、５課）を課している。最後に期末テスト（１課～５課）を行うが、成績は期末テストの結果を40%、小テストの平均を30%、宿題の平均を30%として計算してつける。

2．クラスの目標

「漢字３」クラスでは、初級の漢字を300～500字ぐらい知っている学生に、さらに中級の漢字150字の読み書きとそれらを使った漢字語彙の用法を指導することにより漢字750字程度の総合的な運用力をつけることを目標としている。特に非漢字圏学習者、漢字圏学習者などが混在していることから、個々の学習者に自分の弱点を自覚させ、それらを克服させるための学習法、例えば漢字の意味・構成要素・読み・用法などによるグルーピング、意味的に対になる漢字語彙、漢語動詞の用法、漢語形容詞の用法、同音の漢字語彙の用法などに注目する方法を紹介し、自分にとって有効な練習方法を工夫させることを目指している。

3．授業の進め方および特徴

受講生には、初回にスケジュール表を渡して簡単なクラス・オリエンテーションを行い、教科書として使用する『Intermediate Kanji Book』vol.1 の最初に載っている「漢字力診断テスト」[1]によって個々の学習者の弱点を診断し、このクラスにおいて強化すべき学習項目についてフィードバックする。

このクラスでは、ほぼ２回で１課を終え、小テストを行うという進度になっているが、教師は毎学期、受講生のテスト結果を参考にしながら、授業で焦点を当てるべき学習項目、および各学生から提出させる宿題をチェックして返却する際のコメントなどを考慮している。

教科書の各課は、以下のような構成になっている。

1）復習（解答付き）

2）基本練習

3）要点

4）応用練習

5）課題

授業の進め方としては、まず受講生に、新しい課に入る前に、「復習」の問題をやり、自分の答と解答と突き合わせること、「要点」のページを読んでくることを要求している。

各課の最初の授業では、パワーポイントを使って、その課の要点を視覚的に確認した後、「基本練習」に入る。まず受講生１人１人に練習の問題を割り当て、答えを板書してもらう。次に答えを書いた学生に問題と答えを大きい声で読ませ、教師が答え合わせをしながら、多くの受講生にとって有用と思われる関連情報を提示したり学習方法などを紹介したりする。教科書にある学習項目以外にも、漢字圏学習者などの困難点とされる長音・短音の区別や清音・濁音の区別、漢字音の促音化のルールなどについて解説することが多い。学習漢字については、巻末の漢字索引で、音読み、訓読み、熟語の用法などについて確認し、宿題をするように指示する。

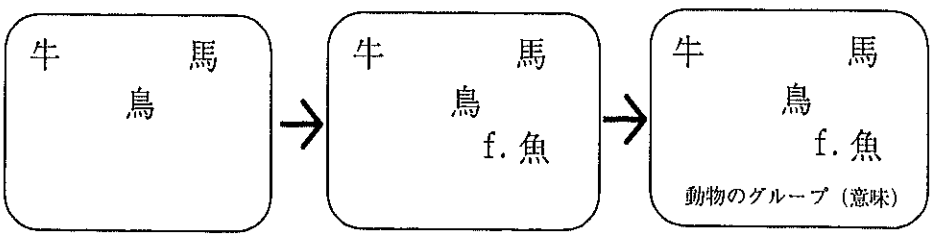
各課の２回目の授業では、「基本練習」と同様のやり方で「応用練習」を行うが、教科書にある「要点」の中から、特に受講生の弱い点については再度指摘する。それから受講生２人ずつを組にして、その課の学習漢字語を含む文のペア読み練習をさせる。

クラスの特徴としては、パワーポイントを使った重要な学習項目のプレゼンテーション、非漢字圏学習者でも漢字圏学習者でも一緒に練習できるペア読み練習、などの工夫が挙げられる。以下にその具体例を示す。

3-1．重要学習項目のプレゼンテーション

第１課「漢字の仲間」では、パワーポイントを使って、「復習」の問題をクラス全体で考えさせながら、正答を示し、要点となる学習項目を確認する。この漢字の仲間づくりは、主に形、音、義および用法によって漢字のグルーピングをすることにより、既習の漢字および漢字語彙を整理、復習するという学習方法の紹介も兼ねている。

例１：漢字の仲間（パワーポイント）



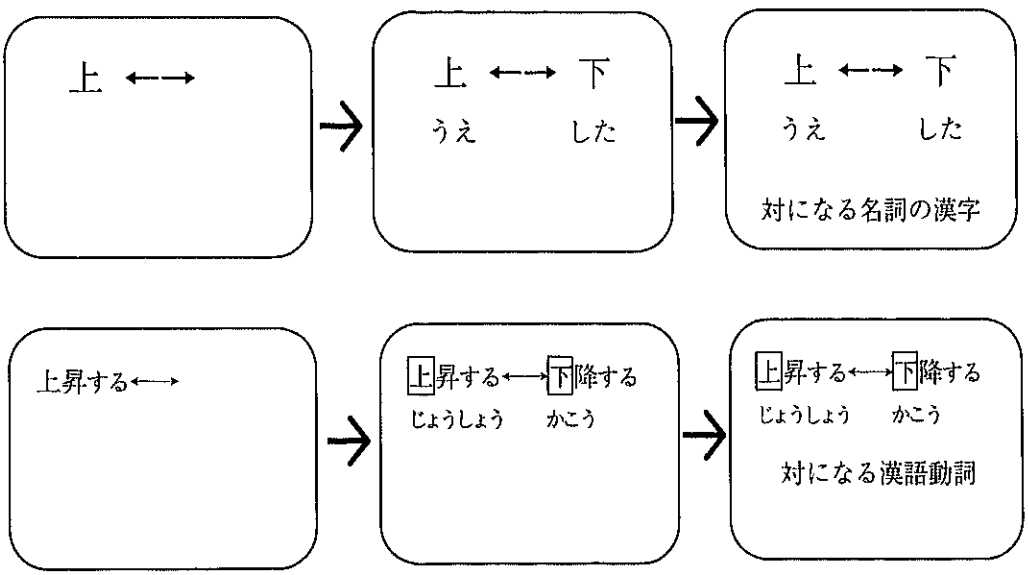
上記の例1のように、パワーポイントを使うと、受講生の答えを聞いてから正答を提示するという時間差を作ることができ、また口頭のみで正答を与えられるよりも視覚的に確認することができるという利点がある。最後にこれらの漢字が何のグループだと思うか聞き、受講生からの答えを聞いてから正答を示す。余力があれば、同じグループで他にどんな漢字を知っているか言わせることもできる。同様に、「読　誌　話　語（字形のグループ）」、「大　早　低　高（用法のグループ）」、「軽　形　計　経（同じ音読みのグループ）」などの練習を次々とさせ、仲間づくりによる整理法を紹介してから、基本練習に入る。

このような字形、意味、用法、読みなどによる漢字のグルーピングは、診断テストでは「仲間はずれ探し」という課題として出題されているため、受講生はここで別の方法でフィードバックを受けることになる。受講生に余裕がある時には、宿題として仲間づくりの問題を作らせたこともあるが、「同じ画数の漢字のグループ」「春に関係のある漢字のグループ」「カタカナを字形に含む漢字のグループ」「左右対称の漢字のグループ」など、独創的なグルーピングを考え出す者もいて面白かった。

3-2．意味的に対になる漢字語彙

第2課「反対語の漢字」では、パワーポイントを使って、まず対概念を表す漢字を復習した後、対になる漢字を含む漢字語彙の対関係を紹介する。例2に示すように、熟語中で対になっている漢字は色を変え（本稿では、該当部分を四角で囲んだ）、学習者の注意をひくようにしている。

例2：反対の意味を表す漢字（パワーポイント）

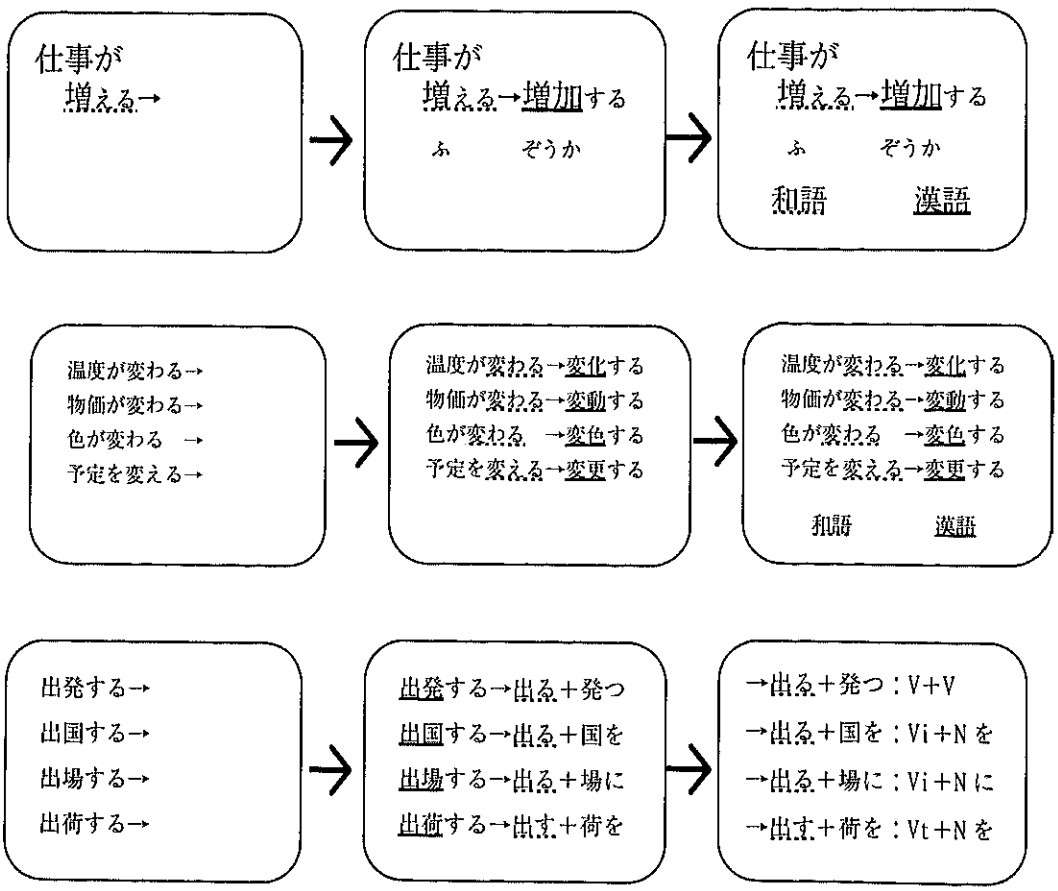


「上」と「下」は名詞の対であるが、「上昇する」と「下降する」は漢語動詞の対になるという指摘をすると、受講生の方から「上がる」と「下がる」は動詞だというコメントが出る。そこで、「上げる」と「下げる」もあり、自動詞と他動詞があることを思い出させた上で、「上昇する」と「下降する」は自動詞なのか他動詞なのかという問いを発して、受講生に漢語動詞の品詞の問題について考えさせることもできる。

3-3．漢語動詞の用法

既習と思われる和語の動詞の漢字から、その漢字を使った漢語動詞を思い出させ、和語には訓読み、漢語には音読みという関係を強化する。また、漢語動詞の語構成や用法にも注意させる。パワーポイントでは、訓読みと、音読みで色を変えているが、下の例では、下線の種類で違いを示す。

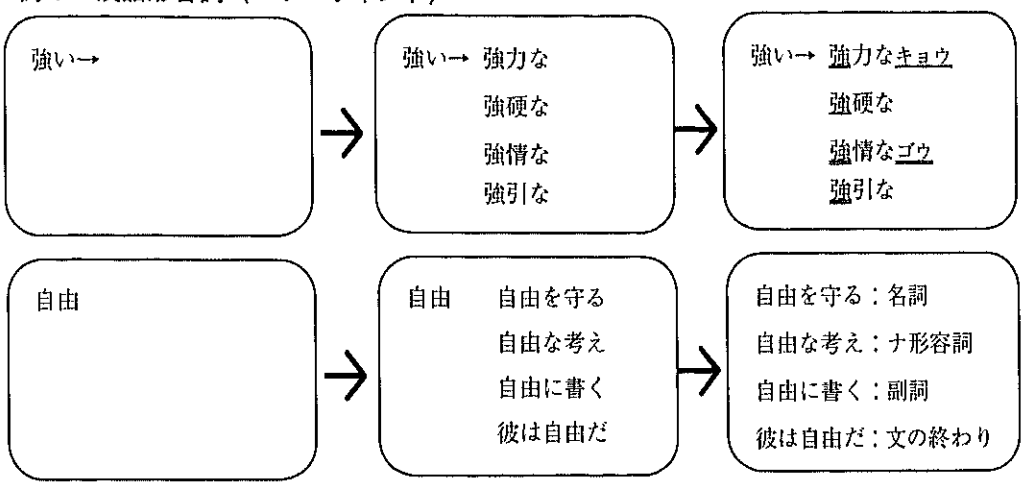
例3：漢語動詞（パワーポイント）



3-4．漢語形容詞の用法

既習と思われる和語の形容詞の漢字から、その漢字を使った漢語形容詞を紹介し、和語には訓読み、漢語には音読みという関係を再度強化する。例4のように音読みが2種類あるものは、色を変えて（例4では、一方を下線、もう一方を二重下線で示した）注意させる。また、漢語形容詞が文中でどのような形で使われるかという用法にも注目させる。

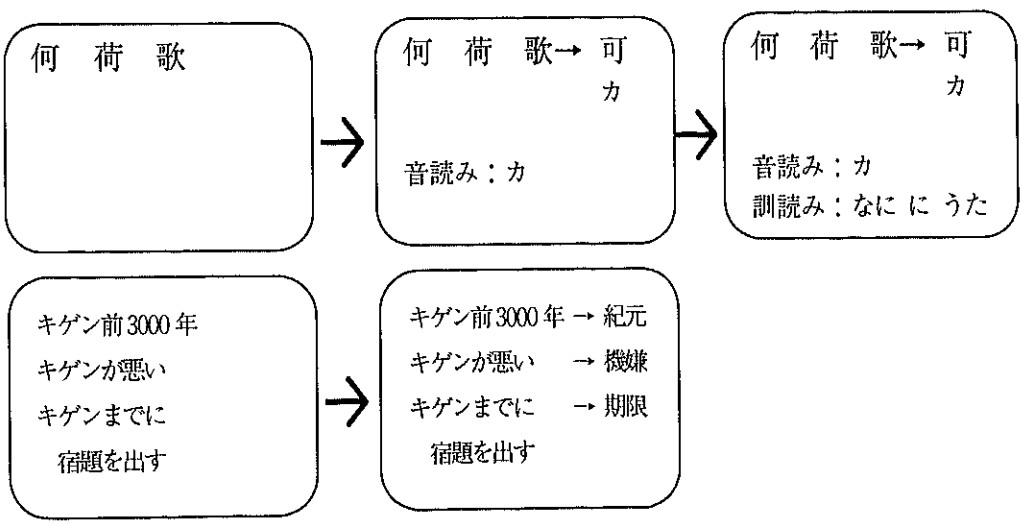
例4：漢語形容詞（パワーポイント）



3-5．同音の漢字

同じ音読みの漢字の中には、形声文字で同じ音符を持つものがあるので、そこに注目させ、音読みが音符から類推できることを確認する。復習のために、その漢字の訓読みも見せるが、中には訓読みがあまり使われないものもあることに注意させる。また、同音の漢字語彙の漢字を思い出させ、その意味と用法の違いにも注目させる。

例5：同じ音符を持つ漢字（パワーポイント）



3-6．ペア読み練習

漢字圏学習者と非漢字圏学習者、予習復習に十分時間がとれる者とそうでない者など、クラスにレベルの違う学習者が存在する場合、難しい応用練習に時間をかけすぎるとドロップアウトする者が出る一方、易しい練習ばかりしていては、できる学生が飽きてしまう。そこで、どのようなレベルの学習者でも互いに助け合って速読の練習ができるように工夫された練習方法がペア読み練習である。学習者は、ＡシートとＢシートが裏表両面にコピーされた読み練習の紙を受け取り、２人一組になって練習する。

例６：１課のペア読み練習シート

Ａシート　１．エベレストは**世界**で一番高い山だ。

２．子どものころ、家が**貧乏**だった。

３．**気象庁**の発表によれば、あすは晴れるらしい。

４．**首相**は来月、**南仏**を訪問する予定だ。

Ｂシート　１．エベレストは**世界**で一番高い山だ。

２．子どものころ、家が**貧乏**だった。

３．**気象庁**の発表によれば、あすは晴れるらしい。

４．**首相**は来月、**南仏**を訪問する予定だ。

Ａシートを見る者は奇数番号の文を読み、Ｂシートを見る者は偶数番号の文を読むが、相手が読む文の中にある漢字には全てふりがながふってあるため、自分では読めない学習者でも、相手が読んでいる時にその読みが正しいかどうかチェックしてあげることができる。漢字圏学習者は、漢字を書く練習には強いのだが、正確に読む練習には弱いため、非漢字圏学習者にチェックしてもらうことも度々ある。このレベルの学習者の中には、学習漢字の読みは覚えたばかりで記憶が新鮮でも、それ以外の習ったはずの漢字語の読みを忘れている場合も多いので、文を読みながら復習することができる。

４．今後の課題

パワーポイントによる学習項目のプレゼンテーションは、まだ今年度から始めたばかりの段階であり、今後どのような形で効果的な練習につなげていくかを工夫する必要がある。また、漢字圏学習者、非漢字圏学習者などが混在する中級クラスにおいて、特に個人によるレ

ベル差も大きい場合、いかに効率的に学習者各自の弱点を克服させていくか、診断テストのフィードバックの方法、授業での指導、練習のあり方とともに、宿題およびそのフィードバック方法などについても検討していきたい。

注

(1) 『Intermediate Kanji Book』vol.1の最初に載っている漢字力診断テストは、中級レベルの学習者の漢字処理能力を形・音・義・用法の観点から形成的に評価した結果をレーダー・チャートによって視覚的に表示し、学習者に自分の弱点を自覚させることによって、その後の漢字学習に役立てることができるテストである。加納・他（1992）および加納（1997）によれば、漢字圏学習者、非漢字圏学習者、また学習者個人のそれまでの学習方法などにより、強いところ、弱いところに特徴が現れるという結果が出ている。

参考文献

加納千恵子・他（1992）「漢字力の測定・評価に関する一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論』12号，177-191

加納千恵子（1997）「非漢字圏学習者の漢字力と習得過程」『日本語教育論文集　－小出詞子先生退職記念－』凡人社，257-268